

前橋市

地域福祉市民ワークショップからの提案書

前橋市の地域福祉を支える

「3つの柱」の提案

令和7年3月19日

< 目 次 >

内容

～ はじめに ～	- 1 -
Ⅰ 前橋市 地域福祉市民ワークショップの開催概要	- 2 -
Ⅱ 地域福祉市民ワークショップから挙げた共通する課題.....	- 5 -
Ⅲ 課題解決のために必要な3つの柱.....	- 9 -
Ⅳ 『障がい』を「社会の問題」としてとらえる（Aグループ）	- 12 -
Ⅴ こどもと親が安心して暮らせる社会のために（Bグループ）	- 14 -
Ⅵ 『高齢者』が自分のことを自分で決められる社会に（Cグループ）	- 19 -
Ⅶ 自分ごと化会議に参加して、変化したこと	- 24 -

～ はじめに ～

この前橋市地域福祉市民ワークショップでは、「私たちの『福祉』を自分たちで考えよう」をテーマとして、私たちが住むこの前橋で地域共生社会^{※1}の実現に向け、誰もが安心して住みやすい前橋にするにはどうしたらいいかなど活発な意見交換が行われました。

地域福祉^{※2}という聞いたことがある言葉ではありますが、普段はあまり意識したことのない話題でもあり、ワークショップ序盤ではなかなか自分のこととして考えることができませんでした。地域福祉とは当事者の問題であって、関わりがない市民は蚊帳の外にいたいと思っていましたが、市民委員の方々の話や第3回会議でお話しいただいたナビゲーターの伴幸俊さん(公益財団法人 豊田地域医療センター理事・事務局長、元豊田市福祉部長)の講演を聞き、どこか他人事だと思っていた地域福祉のことも自分たちが関わることで当事者になれると考えるようになりました。この意識を持つことこそが地域共生社会の実現に向けた第一歩であると今では実感しています。

前橋市では市と社会福祉協議会が連携し、手厚い支援制度があることも分かりました。そして、情報発信の強化に向けて力を入れていくという市長のご発言もあったとおり、今後ますます市民にとっても分かりやすく、そして住みやすいまちとなることを感じております。私たち市民もこの町のことを自分ごととして捉え、ひとりひとりが支え合う町の実現に向け貢献していきたいと思います。

今回、私たちは「障がい者」「こども・子育て」「高齢者」というテーマのもと3つの班に分かれて話し合いを行いました。会議が始まる前、市民1500名を対象にアンケートが実施され、前橋市民の関心が大きい分野は「障がい者」「こども・子育て」「高齢者」の3つであることが分かりました。とはいえ、地域福祉が抱えている課題は1つの分野ごとに線引きできるものではなく、それぞれの分野で同じ課題があったり、いくつもの分野が絡み合った課題があったりと、非常に複合的かつ横断的なものであることは認識しております。しかし、その複合的かつ横断的な課題を見つけ出すために、あえてテーマを縦割りにして話し合い、そこで出た課題の中から共通しているものを探っていくことで、大きな目で見えた前橋市の地域福祉の課題というものが見えてくるのではないかと考えました。そして、このように各班で分野ごとに話し合いをしたからこそ見えてきた共通の課題を見出すことができ、この提案書の中にまとめました。

本提案書では、これらの議論を通じて得られた貴重な意見や提案をまとめ、前橋市がより包括的で持続可能な地域福祉を実現するための柱を示すことを目的としています。私たち市民の思いが結集された本提案書が、前橋市の地域福祉のさらなる発展に貢献することを心より願っております。

令和7年3月 前橋市 地域福祉市民ワークショップ 委員一同

※1 地域共生社会とは：年齢や性別、障がいの有無、経済的状況などに関わらず、すべての人が地域の中で支え合い、誰もが安心して暮らせる社会

※2 地域福祉とは：地域で暮らす誰もが、住み慣れた地域社会の中で、自分らしく誇りを持ち、安心して生きがいのある生活が送れるよう、自らが地域における生活課題を発見し、自らの能力を発揮することでその解決に取り組むとともに、地域での支え合いや助け合いといったつながりや仕組みを築いていくこと

I 前橋市 地域福祉市民ワークショップの開催概要

○テーマ 私たちの「福祉」を自分たちで考えよう

○前橋市 地域福祉市民ワークショップ 委員

無作為に抽出し案内を送付した人数	1500人
無作為抽出により応募した委員（応募率）	48人（3.2%）
参加した委員の数（合計）	43人

○前橋市 地域福祉市民ワークショップ委員一覧（五十音順）

青木 勇	阿久津 智一	阿部 多恵子	安藤 由紀子	井上 洋子
岩佐 大輔	榎本 剛	大澤 秀美	大澤 美貴	岡田 留美
荻原 健	尾上 順子	樺沢 麗奈	栗原 光希	小和瀬 陽太
近藤 美鈴	近藤 琉生	篠原 ゆき江	清水 裕美	眞貝 奈央
関根 姫夏	瀬間 ななえ	高橋 潤	高橋 初枝	中島 瑞紀
難波 陽介	野池 伸一	橋本 貴人	林 百々花	深澤 充代
深町 真嗣	松村 香代子	水信 有衣	柳井 亮人	

※掲載に同意いただいた委員の氏名を掲載。

○前橋市 ※テーマである「地域福祉」の担当部局として会議に参加

- ・福祉部社会福祉課
- ・福祉部長寿包括ケア課
- ・福祉部障害福祉課
- ・こども未来部こども支援課

○一般社団法人構想日本

<コーディネーター（議論の整理役）>

- ・上久保 明治（元 浜松医療センター事務部長）
- ・中田 華寿子（一般社団法人構想日本 理事）
- ・尾中 健人（一般社団法人構想日本 プロジェクトマネージャー）
- ・石川 喬弘（富岡市 富岡地域づくりセンター 係長代理）
- ・坂本 健太（一般社団法人構想日本 プロジェクトリーダー）

<ナビゲーター>

- ・伴 幸俊（公益財団法人 豊田地域医療センター 理事・事務局長、元豊田市福祉部長）

<補助スタッフ>

- ・石塚 康志（一般社団法人構想日本 フェロー）

○各回の概要

- ・第1回会議：2024年11月2日（土）
 - ・地域福祉市民ワークショップの趣旨説明（前橋市社会福祉課）
 - ・自分ごと化会議の主旨説明、アンケート結果の報告（構想日本）
 - ・前橋市地域福祉の現状説明（前橋市社会福祉課）
 - ・委員の自己紹介
 - ・日常感じていることや課題についてグループワーク
 - ・「課題シート」の記入

〈第1回の話し合いポイント〉

自分ごととは？ 日常で感じている課題はなに？



- ・第2回会議：2024年12月1日（日）
 - ・第1回会議の振り返り
 - ・課題解決を阻害しているカベと解決方法についてグループワーク
 - ・「改善提案シート」の記入など

〈第2回の話し合いポイント〉

サポートを必要としている人は？ 状況は？ あなたならどうする？



- ・第3回会議：2025年1月19日（日）
 - ・構想日本 加藤代表の講話
 - ・前橋市町社協について（前橋市社会福祉協議会）
 - ・ナビゲーターによる講演 伴 幸俊 「地域共生社会の実現に向けた地域づくり」
 - ・グループワーク
 - ・「改善提案シート」の記入など

〈第3回の話し合いポイント〉

ナビゲーターからのキーワード⇒「連携と人材」、「アウトリーチの重要性」
 ありたい姿を実現するために自分たちができることは？



- ・第4回会議：2024年2月16日（日）
 - ・提案書素案の概要説明
 - ・提案書素案を基にグループワーク
 - ・「意見提出シートの記入」など

○集合写真



II 地域福祉市民ワークショップから挙げた共通する課題

■地域福祉を自分ごとへ

地域福祉にかかわるテーマ、「障がい者（A班）」、「子ども（B班）」、「高齢者（C班）」について、無作為で集まった私たち市民委員がそれぞれ班に分かれて、話し合いをしました。自己紹介からスタートし、最初は今後の展開が不安な委員もいる中、コーディネーターを中心に議論を深めていきました。

話に耳を傾けると、市民委員それぞれ立場が違い、切実度や切迫度に違いがあることがわかりました。すでに自身が当事者やその家族であり、大きな課題として立ち上がっている委員もいれば、福祉という言葉にあまりピンときていない委員もいて、多様な立場の集まりでした。

他方で、「地域福祉」は、いつでも自分自身が「当事者」や「関係者」になり得るものだという理解も進みました。違った立場の人の話を聞いたり、新たな考えや情報に触れながら、改めて地域福祉を自分ごととして捉えてみるのが議論の出発点となります。

■複雑に絡み合いながらも共通する課題

話し合いを進めていく中で、地域福祉について課題と感じていることには共通的部分があることが浮かび上がってきました。地域福祉に関する課題は明確に区切れるものではなく、複雑に絡み合っていますが、課題について私たちが話し合った内容を整理すると次のとおりです。

1	支援を必要とする人が何に困っているのかわからない また、どのように人を助けていいのかもわからない
2	コミュニティ・地域のつながりが薄くなり、顔の見える関係が作れず、 困っている人をますます孤立させてしまっている
3	行政サービスの使い勝手がよくない（ソフト／ハード） 積極的に手を差し伸べる姿勢（アウトリーチ）が足りない
4	情報が不足している （提供支援サービスの内容、提供場所に関する情報が浸透していない、 市民が日常的に目にするコミュニケーション手段が使われていない）
5	若い市民の地域福祉への参画機会や教育が不足している

会議でどのような意見が出たのか、実際の声を紹介します。

1

支援を必要とする人が何に困っているのかわからない また、どのように人を助けていいのかわからない

困っている人は至るところにいる。

誰が、何に困っていて、どうすれば助け合えるのか、私たちは知る必要がある。

市民委員からの実際の声

- 市民が福祉に関心がない、福祉について考えたり話す機会がない、学校では教えてくれない
- 何をやっていいかわからない
- 実は支援を必要としている人は、自身が課題を抱えていることの認識がない場合があり、助けようにも助けられない
- 孤独な高齢者は孤独なままで、地域の困りごとが吸い上げられない
- 困っていても SOS が出せない、また手を挙げようとしな
- 障がいを理解できずに手が出せない(助けていいのかわからない)
- 内部機能障がいの方への対応(目に見えない、外から分からない)
- プライバシーの壁もあり、ご家族で障がい者を内緒にしたがるものもあるので、個人的な手伝いが難しい
- 子育てしていても個人情報取り扱いが難しく、つながりが作りづらい
- 支援できる人や団体と、支援を必要とする人のマッチングの仕組みがない

2

コミュニティ・地域のつながりが薄くなり、顔の見える関係が作れず、 困っている人をますます孤立させてしまっている

関係性がつくれず、周囲とのつながりが薄くなっていく。

そうして孤立すると、孤独になっていくし、周囲も困っている人に気づけない。

市民委員からの実際の声

- 孤独を感じさせないための、頼られる、役割がある、信頼されている、支える人がいない
- こどもの見守りが不安、学童期の漠然とした不安、経験不足で見通しがたてられない、核家族のためサポート不足
- こども同士のつながりが少ない、社会全体で子育てができていない
- こどもと地域の高齢者の距離が遠くなってきている
- 気になることがあっても、個人情報も気になりおせっかいをしにくい
- 高齢者が多い地区に住んでいるが、住民同士のコミュニケーションが取れない
- 担い手(自治会、団体) / 次世代への伝達が不足している
- 強制的でない有志による支え合い活動の必要性を感じる
- 免許返納等で移動が制限されるが打ち手がない
- 趣味や地域交流を通じた生きがいづくりの場がない

3

行政サービスの使い勝手がよくない（ソフト／ハード） 積極的に手を差し伸べる姿勢（アウトリーチ）が足りない

慣れていない役所の手続きは、難しくわかりにくく感じる。
また、困っている人に、積極的に声をかける人や組織も少ない。

市民委員からの実際の声

- どこに相談してよいかわからない、行政窓口のたらいまわし
- 行政が申請を待つ形であること
- 学童が少ない、場所/人手の確保が困難
- 経済的な支援を必要とする家族の存在、経済的理由から仕事優先で子育てや行事参加がままならない親がいる
- 身寄りのない高齢者への支援策が必要
- 公園を利用する時、高木の枝が落ちてきて危険（落木、枯れ枝等）あるいは雑草が育ち遊べない
- 育児休暇が十分とれない
- 介護人材の不足
- こども（子育て）ヘルパーがない（高崎市は250円で利用可能）
- 困っている人と地域福祉の担い手を橋渡しするプラットフォーム（基盤）がない
- 行政の行なっている引きこもりのお子さん向けの講座のネーミングを、より参加しやすくなるネーミングに変えてほしい
- サービスを必要とする人にサービスが適切に届いていない
- ニーズと福祉サービスのミスマッチがある

4

情報が不足している （提供支援サービスの内容、提供場所に関する情報が浸透していない、 市民が日常的に目にするコミュニケーション手段が使われていない）

どこで、どんな時に、どうすれば欲しい情報を得られるのか。スマートフォンを持っていない人や、インターネットを使えない人もいるから、みんなに情報が届いているとは限らない。

市民委員からの実際の声

- 市がやっていることがわからない、行政が提供している制度が周知されていない
- 市の地域福祉計画は網羅的だが、市民にアピールできていない
- 介護、行政のサービスを分かっていない
- 悩みや困りごとの支援を受けるためにはどうしたらよいかわからない
- 社会全体でDX（デジタルトランスフォーメーションによる利便性向上・効率化）が進んでおり、行政サービスもオンライン化が進む。しかし流れが速すぎて、取り残される危険性をはらむ
- 高齢者が利用しやすいサービス、情報伝達手段が必要
- こども手当の情報等を日常的にフェス等の場で共有化してほしい
- どういう福祉（行政）があるか知らない
- 初産時の情報が足りないことによる不安
- 情報が少ない、情報は数多く存在するのであるが、情報が入ってこない
- こどもを連れて遊びに行く場がない又は知らない
- 子育てで困ったとき誰に相談すれば良いのか（保育園を決めるときなど）
- 保育園や幼稚園の選び方（欲しい情報が分かりづらい）

5

若い市民の地域福祉への参画機会や教育が不足している

若い人が地域のことについて考えたり、活動したりする機会が少ない。
もっと若い人の意見を聞けるような仕組みが必要だ。

市民委員からの実際の声

- 学校や職場で障がいのある人とない人という線引きがされている
- 中学生までは地域活動に参加する機会があるが、高校生が地域の活動に参加する機会が少なく、高校生も忙しい
- 高校生向けの活動がない
- ホームルームや社会に関する時間の中で福祉への取組みについて考える時間がある
- 若者が医療や看護に対しての関心があまりなく、後に新たな人材に繋がる可能性がない
- 地域福祉や社協の取組みについて、教育現場で触れる機会が少ない

III 課題解決のために必要な3つの柱

■ 地域福祉は、いつか誰もが関わる可能性があるからこそ

地域福祉の議論を進めるにあたり、特に大きかった声は前項の課題にある通り、「行政事務の縦割りによる弊害」、さらには、「本当に困っている人を見つけ出すためのアウトリーチ不足」でした。ナビゲーターの元豊田市の伴氏の話聞いても、税金を活用している以上、受けるべきサービスを受けられないことはあってはならないし、困っている人や孤独な人を取り残さないようにしていくことが求められていることが再確認できました。昨今の地域のつながりの希薄化やプライバシーに配慮するという時代の流れの中で、どうしても一個人でできることには限界がある、踏み入れることができないこともあるからこそ、支援が必要な人には行政が積極的にサービスを提供すべきであるという声もありました。

一方で、興味深いのは「求めるばかりでいいのか？」という声でした。例えば、「情報が不足している」という課題はどのテーマを議論している中でも挙がってきましたが、**自分たちが果たして情報を積極的に取ろうとしているか、周りの人たちにアンテナを張り切れているか。「行政の周知が足りないからもっと工夫してほしい」という声だけではなく、少しでもいい、自分でできる範囲でいから情報を取りに行ったり、地域活動に貢献しようとしてきたかも大切であることも認識しました。**

当然、市民それぞれの生活事情もある中で、市民それぞれのやり方で地域活動に貢献できている人もいるし、中にはやりたくても、様々な理由でできない人もいることがわかりました（手伝いたくても身体が不自由になった等）。

結果、福祉、支援というものはサービスを「する側」と「される側」ということではなく、もっと大きな意味で誰もが関係し得ることであるということ。一人ひとりがそれらを認識することの重要性を感じながら議論を進めると、課題を解決し、ありたい姿を実現していくために大きく「3つの柱」に基づき施策を進めていけるのではないかと考えました。

柱 1 : 人づくり

定義：

社会の主役・担い手である**地域の市民一人ひとり**が、お互いの理解を深め、より深くつながり、多くの人々が活動に参加し、時には助け合うことで課題を解決する

- **【知る】** 個人、地域、行政支援の仕組みやサポートが必要となる要因や状況のことを知って、周囲や地域に伝えていくこと
- **【行動する】** 個人、地域、行政それぞれが支援を必要とする市民のことを知って、自分たちのできるところから「行動」に移すこと。「義務感」でやるのではなく、自分でできることをやろうとすること
- **【サポートする】** 地域コミュニティや行政が、市民の「知る」機会を作る
ex.地域リーダー向け研修などを行う

柱 2 : 環境づくり

定義：

地域のさまざまな主体が連携しながら、課題解決に挑むことができる社会生活のリアルな場や基盤を作り、活用することで課題を解決する

- 地域住民(サポートを必要とする人を含む)が世代を超えて知り合える「機会」や「場」、そしてイベントを多層的な地域コミュニティが行っていくこと
ex. 「顔」が見える関係の構築
家族以外でも苗字じゃなくて、下の名前と呼べるような関係や場
- 公民館などの公的施設や共生施設を行政と地域がサポートし、地域市民に広くオープンにすること
地域市民が実施する公園の清掃など、地域の人が何か一緒にやろうとする活動に対して、行政が金銭面や技術面でサポートすること
SOSを出すこと、助けを求めることは「悪いことではない」という意識を地域全体で共有できている状態をつくる

柱 3 : 仕組みづくり

定義：

いつでも、どこでも、誰がやっても、一定の効果を出すことができる再現可能な方法やルールを構築し、運用することで課題を解決する

- 支援の仕組みについて、支援を必要とする当事者の状況に合ったものにする
- きちんと周知をしていくこと。その際に、メディアによる一斉広報だけではなく、人と人とのつながりの中で、広まるように発信する工夫をすること(行政職員の人づくりを含む)
- 市の施策、公共施設の活用、社会福祉協議会の施策といった、それぞれの仕組みをきちんと地域共生のために活用すること
- SOSを発信してもかまわないという意識を広め、同時に、サポートしたときに、サポートをした人が不利にならないような仕組みを作ること
- 支援を必要とする人と、支援を提供できる人のマッチングシステムを作ること

これら3つの柱それぞれをきちんと成り立たせるためには、ただ行政がやればいい、社会福祉協議会の人の方がもっと頑張ればいい、ボランティアの方がもっといればいいんだ、ということではなく、それぞれ市民も役割をもって、できることを進めていく。もちろんその旗手に行政や社会福祉協議会が担ってもらいたい想いもありますが、一定の課題意識を持った言動が、市民一人ひとりにも求められていると考えます。

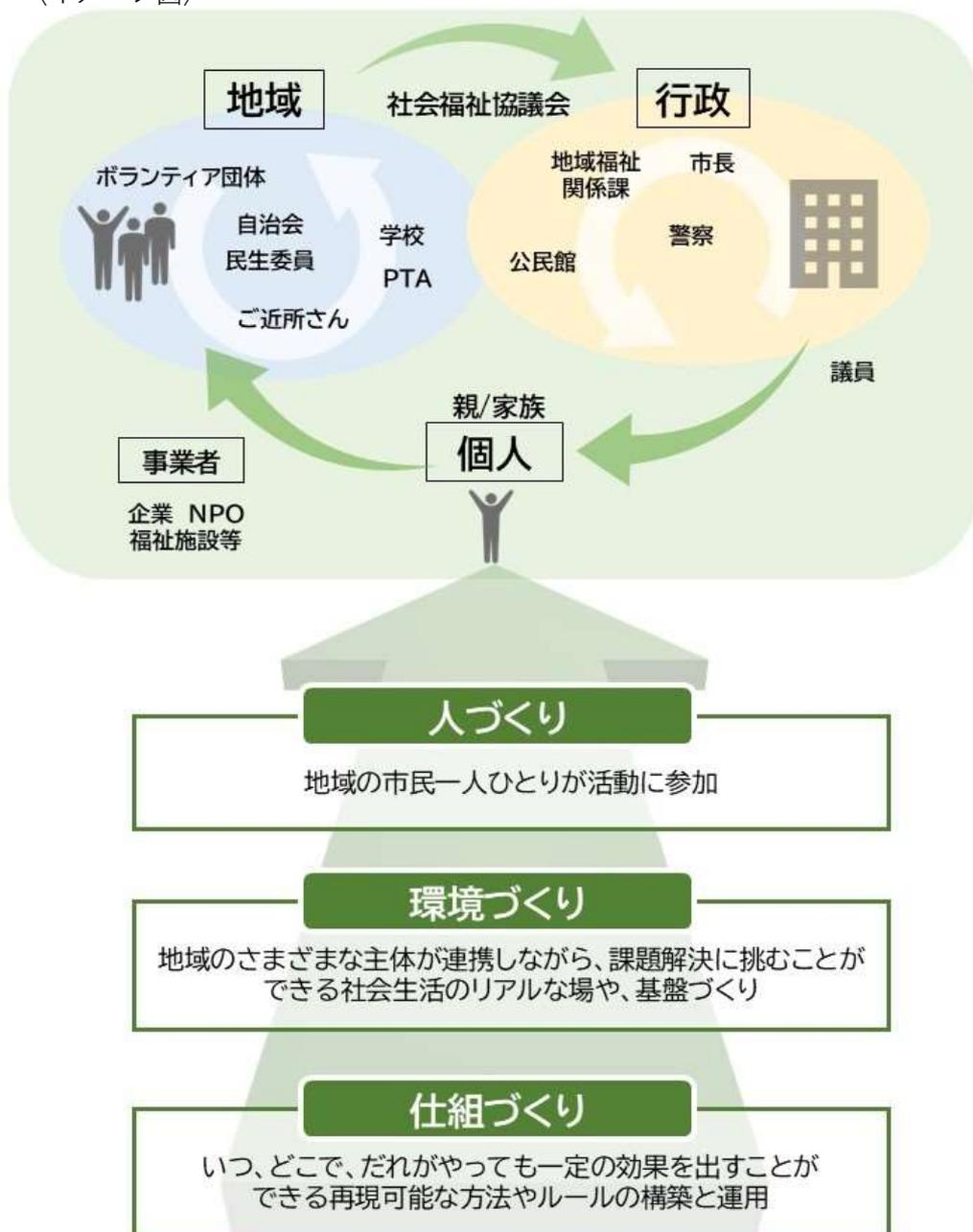
■ 「3本の柱」と「個人」「地域」「行政」の役割

課題解決のための取り組むべき「3本の柱」と、地域福祉を取り巻くそれぞれの立場の人の関係を、図示してみました。会議の中では「それぞれの立場がある」ということを認識しましたが、その「立場」というものをより具体的に挙げながら、大きなくりで、「個人ができること」「地域ができること」「行政ができること」について考え、時にはシートに落とし込んでみました。

このような考え方をしていくことで、私たちが考える本当に解決すべき課題と、それぞれが担うべき役割を具体的に考えることができ、自分ごと化への一助となります。もちろんそれらは決して独立して活動を行うのではなく、密接にかかわり連携していくことが求められそうです。

次章では、それぞれ「障がい者」「こども」「高齢者」のテーマについて各班で挙げてきた議論内容を取りまとめ、提案のまとめとします。

〈イメージ図〉



IV 『障がい』を「社会の問題」としてとらえる（Aグループ）

■“わたしたち”のことを勝手に決めないで！

障がいをテーマに話したAグループでは、「支援を充実させる」という観点ではない福祉のアプローチを考えることに意義がありそうだという雰囲気の中、議論が進みました。問題意識として、「障がい者の種類や程度は人によって異なり、個人差が大きい」、「同じ障がいでも、その影響は環境や周囲の理解によって大きく変わる」、「障がいは目に見えないものも多い」といったことが共有されました。

メンバーの中には、当事者の方やそのご家族もいらっしゃいました。「障がいのある人は〇〇だ！と決めつけないでほしい」という声がとても印象的でした。障がいへの理解を深め、心のバリアを取り除きながらも当事者の声を活かしながら、物理的・情動的なバリアを取り除いていくこと、そんな問題意識をもとに、3つの柱に則して、私たち住民、地域、行政が行うこととして、次のように提案します。

人づくり	
<<課題>>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ “おせっかい”、“自己満足”ではないかと思ってしまう、支援に踏み出せない ➢ 障がい者の方が困っていても、助けていいのか、どのように助けるのか分からない ➢ 障がいは外から分かりにくく、多様であり、個別ニーズをつかみにくい ➢ 障がいの特性を知ってもらうには、いままでのやり方では知ってもらえない ➢ 手助けをして、万が一の事故があった場合どうしたらいいか不安



『人づくり』のためにそれぞれが行うこと		
住民の役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 助けを必要としていそうな人を目にしたら手伝う／助けを呼ぶ ● 支援のためのサービスの存在を知る ● 地域の人と積極的に行動することが必要 ● 車いす体験や手話教室の参加など、もっと障がい者を理解していきたい ● 身近な人や物事に関心を持つ ● 小さな声かけや手助けから始める
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 障がい者のために活動できる人材を育成して欲しい ● 困っている人を見かけたら積極的に声をかける習慣づくり ● 障がい者と住民の交流機会やスペースの設置
行政の役割		<ul style="list-style-type: none"> ● 障がいに関する知識はこどもの頃の福祉経験が有益なので、これは継続していくべき ● 自治会長さんなどの地域トップへの人材育成を依頼したい（地域によって差がある様な気がするため）

環境づくり

《課題》

- 地域で集まる機会が少ない、当事者の声を聴く機会がない
- 障がい者の家族の方は、それを内緒にしたがる
- 「地域の支え合い」では、サポートする側とサポートを受ける側の時間的ミスマッチ
- 「助けたい」という気持ちを伝える機会、場が地域にない



『環境づくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 身近な人が困っている時は、手伝えるが、見知らぬ人にはそうできないので、まずは知り合う機会をつくる ● もっと皆が関心をもって、みんなで一緒にコミュニケーションをとり考えていって、外で活動できる社会にしていきたい ● 啓発ポスターの作成 ● 障がいを障がい者個人の属性と考えるのではなく、社会問題として考えるべき
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 啓発ポスターの掲示 ● 地域内で障がい者の移動の障害となるために直す必要がある場所をチェックして公表。小中高や大学の体験学習とリンクさせるとよい ● 障がい者の人も地域で共生しているので、その話を聞いてアイデアを出していく ● 地域交流のイベントの開催などを通して、住民同士が家族のように助け合える環境を作る必要がある ● 難聴者支援のための要約筆記や筆談サポートなどのような障がい者サポートのサービスについて知る機会を設ける
行政の役割		<ul style="list-style-type: none"> ● 当事者の実際の声を活かしたサービスづくりを行う ● 障がい者に声かけできるように地域イベントを行う自治体への補助を行う ● 地域から出た課題部分をくみ取り、早めに対応する ● イベントや啓発ポスターの公募のサポート

各地区でサロンなどいろいろな機会に参加して地域福祉を理解してもらえるとよい



福祉とは、人間が生き延びる最後の戦略ではと感じている



仕組みづくり

《課題》

- 福祉の窓口が障がいによって分かれており、一元化されていない
- 支援の情報、意識啓発の情報が、届くべき人に届いていない
- サポートの仕組みを利用すると、プライバシーが知られてしまう
- 障がい者を抱えた家族が共倒れにならない仕組みを作らないと、家庭が崩壊する
- サポートをした際に、万が一の事故があることが不安



『仕組みづくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の 役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 支援、人との関わり大切さ、そこへの関心をもっと持たせる仕組みに積極的に参加する ● 助けを必要としていそうな人を目にしたら手伝う／助けを呼ぶ（仕組みにつなげる） ● 支援のためのサービスの存在を知る ● 地域の人と積極的に行動することが必要 ● もっと障がい者を理解していく、いきたい ● 身近な人や物事に関心を持つ
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域に町のことを知る人をコーディネーターとして設置できるようにする
行政の役割		<ul style="list-style-type: none"> ● ワンストップでの対応窓口を周知する ● 支援、人との関わり大切さ、そこへの関心をもっと持たせる仕組み ● 障がい者を支える情報を、障がい者に応じて「口頭、インターネット、TV、チラシ」など伝える手段を工夫する ● 支援策について広報や支援の対象の方に直接的働きかけを行う ● 障がい者を支える専門機関を設置する ● サポートの専門知識を共有しあう（万が一の事故になってしまった場合のことを心配）

知的、発達障がいの方はそもそも外に出づらい、ニーズ把握が難しい

現実に目にする機会がないと自分ごととして対応できない



もっとも皆様が関心をもって、みんなで一緒にコミュニケーションをとり考えていって外での活動もできるサービスをしてやっていける社会でありたい

V こどもと親が安心して暮らせる社会のために（Bグループ）

■ 「困っている」「助けてほしい」を躊躇なく声を上げられるように

「こども」をテーマに話したBグループでは、昨今のプライバシー保護の観点から、親同士ひいてはこども同士のコミュニケーションの難しさを感じたり、情報不足（どこに、誰に聞けばいいかわからない）に悩みを抱え、困っていることが解決しづらいのではないかという問題意識から議論が進みました。一方で、困っている人に対する支援は一方通行ではないはずという共通認識のもと、支援を必要とする人自身が1人で解決できない悩みを抱えていることを自己認識するチカラ、発信するチカラと勇気を持とう！「ありのままをさらけ出してもいいんだ」という個の力を信じる声が多くあがりました。

そんな個の力をベースに、支援が必要な人と、その方たちに手を差し伸べることができる「市民」がいて、「社会・行政、企業」等がきちんとマッチングされ、それぞれが自由な意思で得意なことを活かして課題を解決していける社会が、Bグループの地域福祉のありたい姿です。

市には福祉政策の推進と周知を徹底してもらいたいですが、同時に行政以外でできることは、顔の見えるもう少し小さな単位、ユニット、例えば地域の公民館のようなリアルな場を活用して、より身近な距離で支援ができたらもっと困っている人が声を上げられます。3つの柱でできることがもっとたくさんありそうです。

人づくり	
<p>《課題》</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 個人情報の取り扱い、プライバシーの壁、人と人との間に考え方の差がある（気になることがあっても、個人情報も気になりおせっかいをしにくい等） ➤ 市民がもともとあるサービスをわかっていない、市民が福祉に関心がない（無関心） ➤ 福祉について考えたり話す機会がない ➤ 市民自らが情報入手しようとしにくい ➤ 支援を必要とする人が、自身が課題を抱えていることを自己認識し発信することができない



『人づくり』のためにそれぞれが行うこと		
住民の役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● ありのまま、自分でできることをする ● 個人的な関係を作り、広げていく ● 自分の経験を教える（話す）⇒情報を公開していく ● 積極的に交流していく。今の時代は共働きだからこそ、人と人と繋がる ● 個人からでも SNS を発信していく、進んで情報収集する ● 自らコミュニティを作り、仲間を増やしていく ● 今回のようなワークショップに積極的に参加する
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 個人の悩みを知る場を創る ● 町内行事（自治会）⇒広報と併せて周知してあげる ● 回覧板に情報を載せる ● 1学期に1回は学校の授業として学ぶ時間をとる（1年に1回でも）

行政の役割	<ul style="list-style-type: none"> ● 保育園の細やかな情報を聞きたい人がどこに（だれに）聞けば良いのか教える（難しいとは思いますが） ● 保健所でもマッチングする場を設ける（各保育所の情報） ● 来訪者の立場を理解し、思いやりをもって接し情報提供する ● 集まりをボランティアとして学生に伝える。また、行政証明書発行等することで、学生は自身のためにも参加できるような仕組みにする ● SOS は悪いことでないと周知してほしい（本人だけでなく社会全体に伝えることで本人の心理的負担も軽減してほしい）
--------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

環境づくり

課題	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 情報が少ない（ex. こどもを連れて遊びに行く場がない又は知らない） ➢ 情報は数多く存在するのであるが、情報が入ってこない ➢ 子育てで困ったとき誰に相談すれば良いのか（保育園や幼稚園を決めるとき） ➢ 人と人とのコミュニティがない、横（こども同士、親同士）のつながりがない、知らない人がいる所は怖い ➢ 課題を解決できる人や組織は存在するが、支援を必要とする人の情報を知る機会がない ➢ こどもの見守りが不安、学童期の漠然的な不安、核家族のためサポート不足 ➢ 助けてほしい！HELP!という呼びかけに、すぐ対応できる人や場があるといい ➢ 高校生が地域の活動に参加する機会が少ない、忙しい ➢ 不登校や学習障害など、学校に行けない、なじめないこどもの将来が不安 ➢ 通学路等の道路脇に生えている雑草、公園の高木の枝など事故の原因が目に見えており危険、誰が草取りするか不明（公共、自治会、育成会）
-----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



『環境づくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治会、児童館、自治会館、公民館、ボランティアセンターなどへ積極的に出向いて情報収集&利用する ● SNSなどの多様なサービス（動画など）を利用して情報発信する（誰でもできることではないが得意な人が情報発信する）できるかぎり人に話しかけて情報共有する ● 参加の意識、一步を踏み出す勇気をもつ ● 地域行事・イベントなどへ参加してみる（草むしりとかでもよい） ● 顔見知りになる、呼びかける ● こどもにとって通学路や遊び場でどこが危険なポイントか発見する
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 公民館を開放し活用する、井戸端会議で情報交換する ● 公民館などを居場所としてコミュニケーションの「場」を創る ● 公民館や自治会館、班などがコミュニティレベルで回覧板やポスターで情報発信する ● 強制的に集まる場所や行事を企画する ● 強制参加する場所がいいとも限らない

		<ul style="list-style-type: none"> ● 公民館のような身近なリアルな場や、地元のお祭りなどのリアルなイベントに参加することで、「顔の見える」「下の名前で認識できる」日常から関係性を構築する ● 地域の人や頼りになる人を作る（友人・親同士のつながり等） ● 学校での授業で取り入れ、小学生だけでなく高校生に向けたイベント開催 ● 育成会活動、自治会活動、見守りサポート体制構築、父母会、PTA 活動を活発化させていく ● 多数で行う安全対策を講じていく（交通誘導員、ガードマン等） ● 道や公園の危険なポイントは、地元の人たち（自治会）でできる範囲はやる（草刈りや視認性の悪い低い木の手入れ等） ● 当事者の家族などにも伝わるように状態の変化などを理解でき、すぐに伝えられるような場があることを伝える
<p style="text-align: center;">行政の役割</p>		<ul style="list-style-type: none"> ● SNS などのネットと紙媒体を活用し、だれでもいつでも情報を取得できると良い ● こどもと遊べる公園やレジャースポット、子育て世代の割引が受けられる場所の情報を発信する ● 広報や公民館に対する情報提供 ● イベントの開催やその補助金提供 ● 公園内の刈った草ゴミ、落木、枯枝の回収処分 ● 自由度の高い公民館の使い方を提供する ● 社会福祉フェスティバルなど市民が参加しやすいイベントを開催する



若い人たちも誰もがいつか支援を必要とする立場になり得るからこそ、学校という場で地元の福祉に関する授業や時間を設け話し合うことをもっと行っては？



世代を超えた市民同士が、お互いを知ることができ、顔が見え信頼できる関係性が日常から構築されていることで、困った時1人で悩みを抱え込まず助けてほしい！と SOS 発信がしやすくなる

仕組みづくり

《課題》

- どこに相談してよいかわからない、行政窓口のたらいまわし
- 市がやっていることがわからない、どういう福祉があるか知らない
- こどもの預け先がない、こども（子育て）ヘルパーがない
- こどもに関連する金銭的負担の重さ、経済面における課題
- サービスを必要とする人にサービスが届いていない
- 親が働く環境や就労によって子育ての参加機会が減る

『仕組みづくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の 役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 情報共有、SNS 等を自分で活用し調べる、広報などを見る ● 市のイベントに参加する ● 支援を必要とする人に気づいたら積極的に情報を伝える ● 社会福祉協議会の活動に参加する
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域に町のことを知る人をコーディネーターとして設置 ● 何でも相談できるコミュニティをつくる ● 子育てグループ、ママ友などのコミュニティの横のつながりや LINE グループを作成する
行政の役割		<ul style="list-style-type: none"> ● 支援する人と支援を必要とする人の情報提供をマッチングする仕組みをつくる ● 敷居を低くした行政サービスの提供を行う ● 公民館などとの連携、公民館等公共の場の開放（自由度が高い） ● 夏休み等長期休みのこども預かりシステムを構築する ● 子育てヘルパー窓口を作る ● 学童の場所を確保する ● 行政が行っている引きこもりのお子さん向けの講座について、参加しやすくなるネーミングに変える ● 縦割り行政をなくし、ワンストップで対応できるようにする（行政連絡先を載せるなど） ● 給食費無償化等、金銭的な援助を積極的に行う
その他		<ul style="list-style-type: none"> ● 社会福祉協議会を強化拡充

SNS も重要！でも、公民館のような身近なリアルな場や、地元のお祭りなどのリアルなイベントに参加して、顔が見えたり、時には下の名前と呼べる関係性があると、もっと相手に気づけたり、それぞれの得意分野でサポート



VI 『高齢者』が自分のことを自分で決められる社会に(Cグループ)

■孤独を感じない環境づくり

高齢者について話し合ったCグループでは、**高齢者が幸せに暮らせるためには、自分のことを自分で決められ、自分らしくある環境が必要だ**という一定の結論がでました。「孤独」を感じず、一定程度周りからも頼られ、同時に支えてくれる人がいるということが、根本的に重要だという方向で、議論が進みました。もちろんトピックとして、車社会の前橋における「高齢者の足」や、高齢者を支えるサービスの担い手不足などは、今後さらに顕在化してくる課題であることなども話されました。そんな問題意識をもとに、3つの柱に則して、私たち住民、地域、行政が行うこととして、次のように提案します。

人づくり

《課題》

- 孤独な人は孤独なまま、地域の困り事が吸い上げられない
- 困難な状況にある高齢者を把握しきれていない
- 住民同士のコミュニケーションが取れない
- 価値観の違いから一歩踏み込めない現代の社会事情がある

『人づくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の 役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者や自分自身の状況をきちんと把握していくこと ● 孤独な高齢者が家族であれば、積極的な会話をする ● 自治会などに参加する、関心をもって、近所の人、自治会と関わる ● 助け合う。挨拶する、知り合いになる ● 前橋市、社協の広報を丁寧に読んで、家族や近所の人と情報共有する ● どうすればよいか、どうすれば伝わるかを勉強する ● 自分自身の加齢に対応するべく、ストレッチ、散歩 ● 高齢者とのコミュニケーションの機会を増やす ● 地域福祉事業に関心を持つ
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治会の役割を自分たちでも再考する ● ネット社会への対応を進める（より具体的に進める必要あり） ● 学校で問題を把握し、探求学習を実践する
行政の役割		<ul style="list-style-type: none"> ● 本人が選択できるようにする。必要なところ、必要な人につなげる ● サポートが必要な方にどのように関わっていくか、行政なりのやり方を模索する
その他		<ul style="list-style-type: none"> ● 民間のサポートセンターの拡充

環境づくり

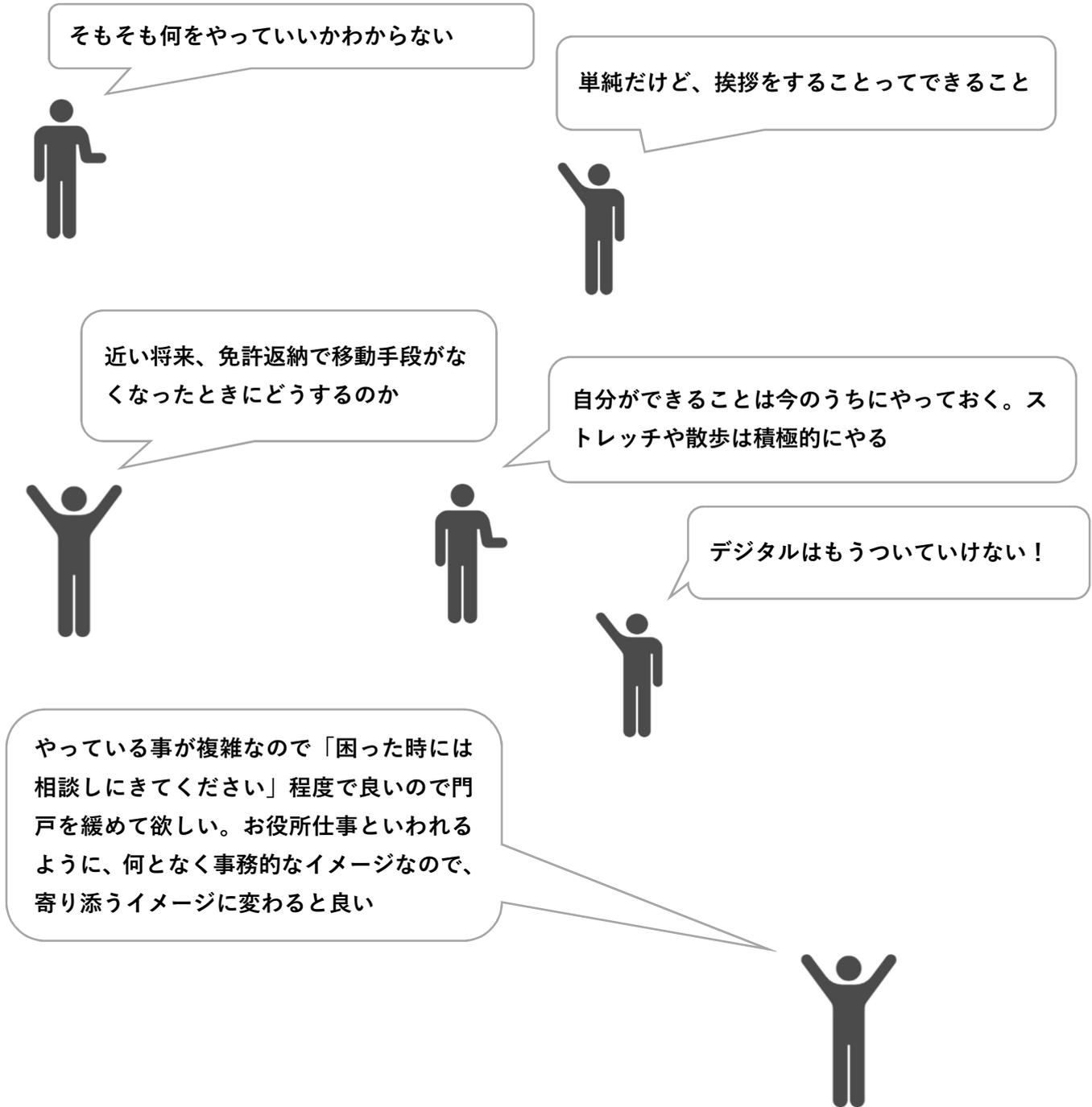
《課題》

- 手を挙げられない、声をあげられない高齢者の発見、助けをどうするか
- コミュニティの減少による孤独な高齢者が増える
- 地域福祉の情報を得る機会と行動を起こすきっかけがなく、担い手が不足
- 困っている人と地域福祉の担い手を橋渡しするプラットフォームがない

『環境づくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の 役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 日頃から挨拶や声かけをして、近所の人と交流を持つ、知り合いになる ● 自治会活動に参加してみる、興味を持ち、参加できるものに参加する ● 孤独な高齢者が家族であれば、積極的に会話する ● 周囲に困っている人がいたら協力できるよう、気付けるようにする ● 様子を見守り、いつもと様子が変わったら相談窓口につなぐ ● 地元の町社協について調べ、家族から横展開で広げていく ● 町社協の存在を周知する ● 隣人として気がかりな人がいれば、民生委員につなぐ ● 近隣との連携、自治会メンバー間、各家庭間での情報共有 ● 老人クラブなどを通じて、アンケート調査、訪問調査を実施する ● 公民館などでの健康サークルに参加する ● ふれあいサロンを開催する ● 地域としてどうしていくのかの考え方を各家庭に広げる ● ボランティアなどを自分たちで集める ● 近所の人とのつながりを日頃から作る（顔見知りの関係、変化に気付ける関係づくり）
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治会で協力しあう ● 自治会活動の見直し（面倒くさい、なぜ必要か分からない） ● 自治会に代わる住民のラフな集まりの場を作る（ポイ活、メダルゲーム、ウォーキング） ● 高齢者とこどもが共同して取り組む三世代イベントを設定する ● 自治会ごとの“町社協”メンバーが地域の学校に出向く ● イベントなどを開催する ● 地域の人がお互い様と思える日常的な見守り（多くの人が緩やかに見守る体制をつくる） ● 高齢者が頼られるように、高齢者ならではの関心ポイント（伝統）で交流する場をつくる ● 近所に病院や買物に行く足のない人がいれば、可能な限り足となってやる
行政の役割	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談できる環境づくり、相談窓口の周知 ● 相談対応→状況の把握、本人の希望の確認、解決に向けた対応→具体的な対策について情報提供 ● 広告をきちんとする 	

	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域ボランティアなどを行政主導で集める ● この提案書を市民に配り、PR する
その他	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校で問題を把握し、身近な話題から地域福祉について学習する ● オンラインでコミュニケーションを取れる場をつくる



仕組みづくり

《課題》

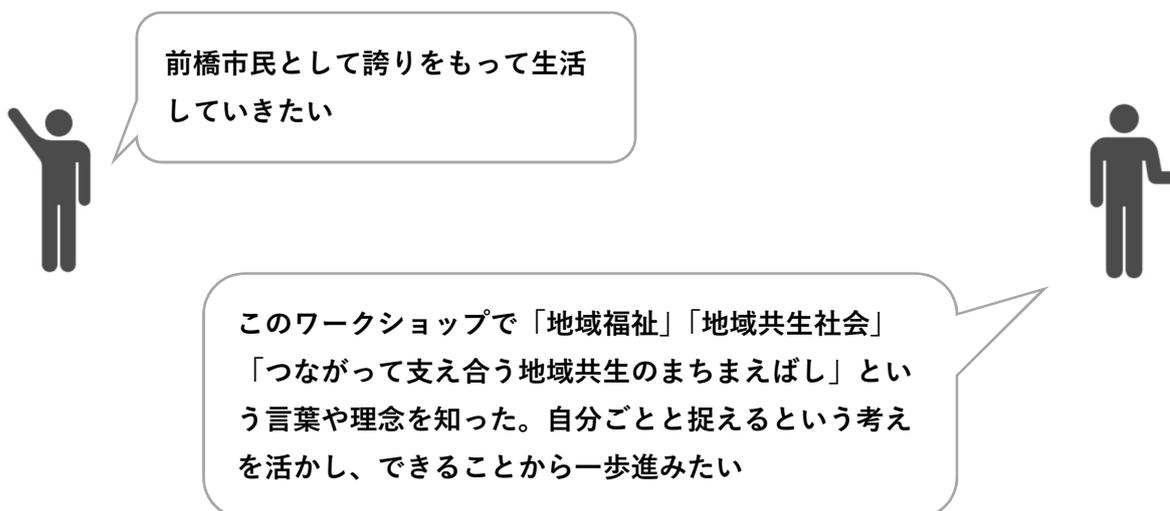
- 老々家族の今後について、本人の希望と支援する家族の間に壁がある
- 求める情報が手に入らない、手にする方法が分からない
- デジタル化が進むが、高齢者はITに弱い
- こどもと地域の距離が遠くなってきている
- 免許返納後の移動手段が少ない



『仕組みづくり』のためにそれぞれが行うこと

住民の 役割	個人	<ul style="list-style-type: none"> ● 見守り、相談相手、手助けから、行政につなげる ● 積極的に支援の情報をキャッチしようとしに行く ● キャッチした情報を周囲に伝える ● 高齢者にタブレットの使い方を教える
	地域	<ul style="list-style-type: none"> ● 回覧板、井戸端会議、会話を行う ● 地域で見守り、手助けを行う ● 自治会での勉強会を実施する ● 自治会の事業として、地域の仲間グループを作り、手当付きの個人タクシーを始める ● 自治会であれば、参加しない時のペナルティーを設けたり、もしくは金銭的なインセンティブを設定したりする（報酬や前橋めぶくポイントの付与など）
行政の役割		<ul style="list-style-type: none"> ● 行政サービス、政策、制度などの情報発信強化、広範囲に行う ● コンビニ、スーパー、ショッピングモール等、多くの方への広報努力する ● 地域住民の生活状況をデジタルで把握、地域と情報を共有する ● 民生委員や自治体職員と話し合う場所を作る ● SNSを活用した広報活動を強化する。ネット+αでの発信する ● PTAの外部依頼のように、支援の中身を外部にお願いする ● 一人でも多くの孤独な人をサポートできる体制づくり（ボランティア等） ● 学校教育現場で教える。学校と連携して、地域福祉について学ぶ時間を設ける（授業、イベント、講演会など） ● 行政が主導して訪問販売の仕組みを作る ● 情報提供のためのタブレットの貸与事業を実施する（ただし利用されない懸念もあり） ● 主要な病院やスーパーを回る巡回バス、タクシーの制度を作る、対応地域を広げる ● サロンへの助成金を行う ● めぶく Pay と G-WALK を連携させ、歩く動機付けをつくる ● 社協と連携してアウトリーチを推進、“多世代参加支援プロジェクト”のようなプラットフォームを立ち上げる

	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域福祉プロジェクトの担い手になる人に、前橋めぶくポイントを付与 ● ヤングケアラーや老々介護の介護する側が自分らしく生きていけるようにする支援の充実・強化
その他	<ul style="list-style-type: none"> ● DX に長けた企業（市民情報のデータベース）



VII 自分ごと化会議に参加して、変化したこと

第1回会議の冒頭、前橋市の担当者から「このワークショップをきっかけに各参加者が自分ごととして地域福祉活動に主体的に関わるようになる。様々な地域福祉活動に広く住民が主体的に関わるようになる。」ことを目指していると説明がありましたが、回を重ねるごとに各委員の意見がどんどん自分ごとになってきました。そして、4回目を終了した今では、このワークショップが目指していたことをこれから行動に移していき、私たちひとりひとりが「つながって 支え合う 地域共生のまち まえばし」の実現に向け参加していきたいと思います。

終わりに各委員が自分ごと化会議に参加して、意識や行動が変わったことや気づきなどをアンケート結果から抜粋してまとめました。

1. 会議に参加してみて変わったことは？

- 地域のこと、身の回りのことを”自分のこと”として考えられるきっかけになった。
- 自分ごと化会議という名前が本当にぴったりだと感じました。自分が当事者にならないと自分ごととして考えられないことをこういう機会を与えていただき意識して自分たちの問題として捉えることができました。
- 日常的な当たり前前に生活していることを見直す機会となりました。
- もっと地元をよくしたいと思って、自治会や公民館の方と関わる機会が増えた。
- 自分自身の地域福祉に対する積極的な姿勢が生じ始めてきた。
- 自治会の集まりで福祉の話をするようになった。
- 地域行事に積極的に参加するようになり、そこから地域の人と関わりを持つようになりました。
- 今やっているボランティア活動を体力が続く限り、続けていきたい。
- 前橋市民として誇りをもって生活していきたいと改めて感じました。
- 最初は「自分ごと化」を行政が市民に問題解決をやらせようとしていると感じたが、そのようにひねくれて考えてはいけないと反省しました。
- 地域活動に積極的に参加するようになった（地域の役員3つ引き受けた）。
 - 自分に返ってくるものばかり求めていたが、意識が変わった。

2. 地域福祉における「自分ごと化」とは？

- 今回このワークショップに参加して私に出来ることはなにか？今後の課題が見えてきました。自分が経験してきた子育ての悩み等を話し、少しでも力になればなと思いました。
- 自分の住んでいる前橋市のさまざまな問題、課題、要望をただ訴えるだけでなく、「自分だったら何ができるのか」「できることから何か始めたらいい」ことかと思えます。
- 自分の考えていることや想い等を発信できたらと思いました。
- 自分が地域社会の一員なんだという意識や行動が大事だと思いました。
- 「自分ごと＝地域ごと」だと思えます。
- 自分たちが「地域自治」の主体であるという意識を持つこと。
- 前橋市のアピールをしたい（SNSで）。
 - 自分や自分の周囲の人だけ安穩に暮らせればよいと考えるのではなく、一人の問題と社会の問題を結びつけて考える事。

3. 会議全体を通じてのコメントや感想

- 子育てがひと段落し、次は姑や親の介護が待っているので、それについても考えるきっかけになりました。
- 今までの引きこもりの子育てと高齢両親のお世話を思い出して、感極まってしまったが、こういう場で話せて良かった。今後は頼るところがある。
- 核家族が増え、子育てに悩みを抱えている母親は増えてきているので今後はそんな人たちに寄り添ってあげられる活動に参加していきたいと思えます。
- 前橋市がより活性化するにはとても良いと思えます。問題提起から自分に置き換えて何ができるか考えていきたい。
- 自治会のあり方や重要性を考えさせられました。
- 市民、行政が個々で話し合ってもそれはただの“雑談”でしかないので、市民、地域の代表、行政など多職種の意見交換の場があれば良い
- 4回参加していろいろな気づきを得られました。自分なりに町内の行事や地域の行事へ参加しながら周りに広げていきたい
- 他人事としてのごことが多い中、高齢者の方たちとお話やコミュニケーションが多くなると良いので、機会を増やしたい

自分ごと化会議

私に関係ある？ ある！

事務局：一般社団法人構想日本

〈構想日本とは？〉

構想日本は「社会を良くしたい」という強い思いを持つ、「実現」する政策シンクタンクです。

「求めるより、任せるより、関わろう。」という理念を掲げており、自分たちの暮らす町や社会を政治家や行政に任せるだけではなく、「顔が見える範囲で関わろうとする」人々を増やしていくことを目指しています。

「動くシンクタンク」として、住民が地域や社会のことを「自分ごと化」するきっかけを作るために「自分ごと化会議」を実施しています。各自治体の住民と話し合う「住民対話」タイプの会議と、行政の仕事について話し合う「事業仕分け」タイプの会議があり、こういった現場の思いや意見を吸い上げ、政策に反映することがわれわれの大きな役割だ